

皆一生懸命に生きてきたことだけは確かである。

今ここに自分の過去のつたない人生を綴ってみて、心肝恐懼であるが、今さらやり直すことも出来ない。

こんな生き方をした者もいたかと知っていたら、たぐいにくたに、
にあえて執筆した。

【執筆者の紹介】

執筆者は、島根県の中南部、広島県との県境の高原盆地にある邑智郡瑞穂町で、水稲、野菜を主体として農業を営んでいます。

私の学友であるとともに、軍隊に入隊、抑留生活を三年、同じ収容所で生活を共にし、帰国の折も行動を共にした戦友です。

(島根県 小笠原 義良之助)

黒パンとラーゲル

岡山県 横畑 友三郎

初年兵以来苦楽を分かち合い親しんだ第三飛行場中隊から、ただ一人第九十七飛行場大隊へ転属を命ぜられたのは昭和十九年一月八日であった。

第三飛行場中隊は佳木斯飛行場に展開中であつたが、依蘭及び長発屯に派遣隊も出ており、わずかな自動車班の戦友たちに見送られ佳木斯駅を出発したのは翌九日の早朝であつた。

当時九七飛行場は北安省嫩江飛行場に展開中で、着任後は大隊本部兵器委員室に勤務し、航空燃料係として日々精励していた。その間に、東軍司令部とか四平街にあつた野戦航空燃料廠等にも公務出張の経験に恵まれた。同年八月、補給中隊に配属替えとなり、終戦の日まで自動車班長として本来の特業に従事することになった。

当飛行場には戦隊が常駐せず、時折飛来する百偵とか、転地訓練のため来飛する各種戦闘機等に対する補給作業のみであつて、日夜苛烈な戦闘に明け暮れている南方戦線の戦友たちの苦勞を偲びつつ来るべき日に備えながらも、平穩な日常勤務であつた。

この地はノモンハン事変後北滿の防衛基地として設営されただけに、齊齊哈爾飛行場よりはるかに広大で、戦闘機の場合には二機が並列して同時に離陸できるすべての施設が完備されていた。北滿に春の訪れは遅いけれども、五月下旬ともなれば、迎春花（黄梅）、芍薬などの草花が一斉に咲き乱れ、広大な飛行場はまるで花畑のように一変し、しばし戦いも忘れるような美しい風景であつた。

このような平穩な日も長くは続かず、戦局の進展とともに、中支の桂林、西安基地より奉天兵器廠、鞍山市の昭和製鋼所に対してB 29による空襲が開始されるに及んで、大隊は、両市の防空戦隊に協力のため、昭和十九年九月一日、遼陽飛行場に移駐命令が下つた。

私は先発隊の器材率領を命ぜられ、私以下五人の者

は、九月八日、十三両編成の軍用貨車に乗り込んで嫩江駅を早朝に出発した。途中、チチハルを通過して昂昂溪駅コウコウキに列車が入構した際、ホームで列車待ちの現地人多数が私たちの貨車を指さしながら大声で叫んでいる。九月も上旬であり、残暑も厳しい昼中のため上半身裸で乗用車二台に分乗していたが、裸のまま慌てて飛び出してみると、次の貨車に積載してあるトラックのシートから白煙が噴き上げている。機関車から噴き出す煤煙に含まれた火粉がシートに落下したことによるらしく、貨車によじ登ってシートを引き破り、やつとのことで大事になるところをくいとめた。このトラックの次の車両には燃料満タンの補給車二台を積載しており、これが列車の走行中に発生した火災であつたらどうなつていたであろうか、全く冷や汗を流した一幕であつた。

この事件を契機として、以後は交代しながら監視を怠らず南下した。夕方には公主嶺駅コウシュンレイに到着。停車場司令部に立ち寄つて部隊本部に電話連絡を済ませ、列車ダイヤの都合により当駅に二時間少々停車する予定の

ため、夕食の用意がないので全員が列車を離れて外出した。夕食を済ませて帰駅したところ、引込線上に貨車の姿がない。日系の駅員に尋ねたところ、ダイヤの変更で十分前に発車した由、「さあ大変」と慌ててみたがどうにもならない。この時、幸いにも奉天行きの客車がホームに停車した。この列車で急追すれば奉天駅には貨車より先に到着できることを確認したので、列車に乗り込み、奉天駅では仮眠もとらず貨車線内でまるで恋人でも待つような思いで待った。翌日早朝四時ごろ、待望の貨車は何事もなかったかのように入構した。私たちもホッとした。以後は何事もなく夕闇迫る七時ころに目的地の遼陽駅リャウヤウに到着したわけであるが、一度ならず二度までも失敗を繰り返しながらようやくの思いでたどり着くことができ、全く幸運に恵まれたの一言に尽きる。

駅には先遣隊員が出迎えに来てくれ、その案内により飛行場に着き、戦隊の給与を受けた。翌十日は早朝より全員で器材輸送に忙殺された一日であった。

十二日には本隊も到着して移駐を完了した。この地

には二式復座戦闘機中隊が配備されており、この戦隊に協力するのが任務であって、奉天、鞍山の両市の防空に任じた。

翌年八月十五日終戦に及ぶ間に数度の空襲も経験した。数少ない空襲戦の生々しい一つの記憶がある。たしか十一月二十日、B 29機の一群が鞍山市に來襲した際、事前の情報によって超高空で待機中の友軍機と空中戦が展開された。この邀撃戦ようげきの最中に友軍の一機が被弾して、尾部より黒煙を噴きながら反転攻勢に転じてB 29に体当たりを敢行し、一機を墜落させて、ともに壮烈な自爆を遂げた。後で知ったが、この勇士は四国松山市出身の少年飛行兵池田軍曹であった。

沖繩攻防戦たけなわのころ、橘、蘭花の両特攻隊が編成されて遼陽基地からも出撃し、悲壮な思いで武運を祈りつつ涙で見送った。それ以来、沖繩での玉碎、広島、長崎への原爆投下と、悲しいニュースで重苦しい空気の漂う八月九日十一時ころ、非常呼集がかかられ、急いで命令受領のため大隊本部副官室に集まって待った。各隊の受領者全員が集合した。

いつもにこやかな温顔の副官荻中尉が緊張した面持ちで、「本日午前六時、ソ軍が日ソ不可侵条約を一方的に破棄し、各方面の国境線を突破して進攻中である、部隊は直ちに戦闘配備せよ」との軍司令官命令を伝達された。戦隊は、連日錦州方面に出撃する燃料の補給に、銃弾の積み込みにと、忙しい数日を過ごした。

さて、八月十五日、生涯忘れ得ない終戦の日、大隊本部の前庭に全員集合してラジオ放送を聞き、夢にも予想しなかった敗戦、一同放心状態にて誰一人として口を開く者はなかった。

大隊長伊東緑大尉の指示により、部隊は今後も一致団結して行動することを誓い、差し当たっては、各所に散在している武器、弾薬等を集積し、なお、機・秘密書類等一切を焼却処分して身辺整理を行い、別命あるまで隊外に出ないこととなった。

八月十九日、ソ軍の指示により、遼陽地区の各部隊は鞍山市に集結することとなった。兵器等の引き渡し未済のため、吉本少尉を長とした一部残置隊を残して、本隊は九月二十日、鞍山市千代田区立の千代田小学校

に集結した。

残置隊は二十一日夜、八路軍（共産軍）の夜襲を受け、これに応戦中、兵器委員室勤務当時お世話になった大西兵技曹長が戦死された。翌二十二日、ソ軍使に一切の武器、弾薬等の引き渡しを終了した。残置隊員は引き揚げの途中、かの日露戦で有名な首山堡においてソ軍とのトラブルにより、同年兵で新潟県出身の難波伍長が戦死をし、九七飛大では終戦後二人の犠牲者を出しながらも一応全員が小学校に集結することを得た。

ある夜、私が司令として学校止門において衛兵勤務中、突如、ソ軍兵士三人がジープを乗りつけ、自動小銃を構えて衛兵所に乱入してきた。私たち五人の者は、反抗の手段も方法も、また言葉さえわからないため、一同は生まれて初めてホールドアップ、反意のないことを示す手段として頭上に双手を上げざるを得なかった。彼らは「ダワイ、チャースイ」と連呼しているが、何のことか意味が通じない。そのうち彼らの一人が時計を示した。それで私たちの腕時計を要求しているこ

とが理解でき、全員が提出した。彼らはそれぞれ五、六個の時計を所持していたが、どれもがとまっております。その時計を机上に放り出して、私たちの動いている時計を喜んだ。彼らは腕時計を所持した経験がなく、ねじを巻くことを知らなかったのである。その際、私の革製のゲートルも取り上げたが、軍刀には手も触れず引き揚げた。

またある日、八路軍が訪れて、週番肩章を要求した。その際に同隊への入隊を勧誘し、条件として、兵隊は下士官に、下士官は將校に任用し、二カ年間勤務すれば必ず日本へ帰すと話していたが、その呼びかけに応募した兵隊は皆無であった。

九月一日以降は他の部隊とともに第一作業大隊に編入された。当時我が国が世界に誇る鞍山市所在の昭和製鋼所の施設一切を本国へ持ち帰るための解体作業のため編成されたものであって、昼夜二交代制によってこの作業に従事した。同所のモーター類、その他の機械はドイツ製品であったが、ほとんど稼働不能な状態にして梱包した。

解体作業もおおむね終了した十一月八日、帰国（ダモイ）命令が出た。翌九日朝食後、全員が一装用の被服を着用して喜び勇んで、多数の在留邦人に見送られながら、鞍山駅へ二十分ほど徒歩行軍して列車に乗り込んだ。輸送列車は貨物車十五両編成であった。貨物車の内部は、床の中央部に三十センチぐらいの四角い穴があけられており、その両側に板敷きの二段の棚が設けられていた。これが輸送中のベッドとなり、穴は便所となる仕組みであった。貨車には四十人ぐらいが詰め込まれ、暖房はもちろん、照明具もない殺風景なものであった。

本当に帰してくれるのだろうか、抑留されるなど誰一人として口にする者はいないが、不安と焦燥のうちに列車は発車した。南へ向かうはずの列車は北へ向かい、やがて遼陽駅も通過したようである。夜半には奉天駅に停車した。

ここで夕食が支給されるので、飯盒を用意して待った。ドアがあげられて差し出された物は、見えない黒パンが各人一切れのみ、今朝まで麦飯であっ

たのが黒パンに変わった。それでも昼食が支給されず空腹を感じていたので口にしてみたが、到底喉を越すような食べ物ではない。やむなく一同は我慢して、これから先どのような運命になるのか、眠れぬ一夜を語り明かした。

列車は、奉天から哈爾濱經由で、北鮮に向かうであろうとの希望的な観測もむなし、私たちの杞憂など無視して一路北進を続行しており、十一日昼過ぎるころにチチハル駅に到着した。支給される食料は相も変わらず黒パンと水のみである。ここまで来たら夢も希望も水泡と消え、今さら離隊逃走したところで今後の明るい展望は見出されない。私たちは^{モシヤウ}組上の鯉同然であって、一蓮托生の心境となり、おとなしく黒パンをかじりながら車中での生活が始まった。

チチハル駅を発車したが、依然として列車は北進を続けており、否応なくソ連に連行されるであろうことを悟った。

国境の街、満洲里も通過して遂にソ連領内に入った。それからは一面雪に閉ざされたシベリア平原を昼夜の

別なく走り続け、途中わずかに給食のため停車するのみである。その際、貨車のドアから限られた視野で眺められる風景は、荒涼殺伐とした風景である。

車内には暖房もないために、夜間はひしひしと迫り来る寒さと飢えとにさいなまれる日が幾日も続いた。

かくして長い旅も、ようやくにして彼らが目指す街へ到着したようである。時に昭和二十年十二月二十五日昼過ぎころ、列車が停車し、下車が命ぜられた。この地がどこなのか、また何という街なのか、誰一人知る者はいない。下車したところは木材の積卸用の引込線の停車場であった。この街にはどこを見ても駅舎らしい建物は見られなかった。

材木置場に集合が終わったころ、トラックに乗って将校以下十人がやってきた。輸送指揮官との引き渡し手続き中に、同胞の兵士であったトラックの運転手に尋ねたところ、この地はウズベク共和国のアンダレンという街であって、同じ関東軍の將兵約五千人が五カ所の收容所(ラーゲル)に分散收容されており、労働に従事であると言う。私たち鞍山大隊は第六收容所

に入ることが判明した。

ソ軍将校の引率により徒歩二十分くらいでラーゲルに着いた。早速作業班の編成及び宿舍割りが行われた。私は、旧補給中隊を主力とした第一作業班に組み入れられた。各班はおおむね百人前後で編成された。

所内には、将校用宿舍一、下士官兵用宿舍六、他に炊事室一、医務室一、洗濯兼シャワー室一、衛兵所の計十一棟の建物があつて、私は一号棟に落ちついた。建物の周囲は、テレビの報道等で諸兄もご存じのように、有刺鉄線が二重に張りめぐらされ、しかも内側の鉄線には常時電流が通じており、また、四隅には地上五メートルぐらいの望楼が建てられ、これには自動小銃で武装した監視兵が昼夜警戒と監視を行い、なお衛兵所には将校以下二十人が常駐していた。

入所後一週間は身辺整理や糧秣運搬等の軽作業に交代勤務であつたが、年も改まった二十一年一月二日くらいよいよ本格的な労働が課せられるようになった。

我々のみが例外的なお客さん扱いではなかつた。なにせ、働かざる者は食うべからずのお国柄、この日か

ら昭和二十三年一月二十九日未明の受傷に至る間、作業量（ノルマ）に追い回され、「早く来て働け（ダワイ・ヴィストレ・ラボート）」の明け暮れであつた。作業内容は、土木、建築、線路工夫、トラック運転手、貨車の積み込み、荷降ろし等の作業が課せられた。

ウズベキスタン共和国アングレン地区に所在する第六収容所が私たちの楽園（？）であつた。同地区を地図上で見ると、中央アジアのパミール高原地帯に属し、東部はタジキスタン、西側はトルクメニスタン、北側はカザフスタンの各共和国に接しており、また南は、さきにソ軍が七カ年間進駐していたアフガニスタンに国境を接しており、ラーゲルの裏山一つ越えれば同国に入ることができる街である。

当地の住民は、かつて蒙古の英雄ジンギスカンが進攻した当時からこの地に住みついた蒙古系の民族であつて、生活様式は満人と同様で、家屋は土で固めた粗末な一間だけの狭い部屋に家族は同居していた。服装、食料も満人と同様であつた。

この地は高原地帯（海拔一五〇〇メートル）のため

寒暖の差が激しく、春五月ともなれば野山は一斉に緑一色に包まれ、七月炎暑のころには草花は枯れる。今も忘れられない気象の変化の一つに、二十一年八月十五日の昼過ぎ、街全体に霧が流れて気温が急激に低下し、そのうちしばらくして降雪を見た。我々は、真夏に降雪の経験がなく初体験であり、きっと涙雨ならぬ涙雪であろうと同僚たちと話したことがあった。

九月も中旬ともなれば炎暑も遠のき、温暖な気候が戻って、再び草木の緑が蘇り二度目の春が巡りきたようになる。そして十月下旬ともなれば日増しに気温が下がり、十一月上旬となると急激な気温の低下が見られ、いよいよ捕虜泣かせの冬將軍の到来である。翌年の春三月下旬ごろまで野山の雪は消えず、一面の銀世界である。

建物は、小高い丘陵地の原野に縄文時代の先住民の住居跡に見られるように穴を掘った掘立式の木造建築である。そして屋根は天井兼用の板を並べ、その上に土盛りがなされており、しばしば雨水の漏水に悩まされた。内部は、土間に丸太の柱が二列に埋め立てられ、

その柱に腕木が二段に取りつけてあって、腕木には幅五十センチほどの板が並べられ、上下二段になり、これが寝台となって、一本の丸太を中心にして四人が共用するようになっており、室内の照明は中央に裸電球が一個設けられていた。

半地下構造のため採光、通風は極めて劣悪であった。しかも十日に一回程度のシャワー浴があるのみで、作業衣もパジャマも同一で不潔なため南京虫や虱の温床となつて、非衛生的な生活環境下での生活を強いられ、これには随分苦勞させられた。

所内には水道施設は一切なく、炊事、シャワー室用の水はタンクローリー車によって街から運んでいた。したがって、起床後の洗面とか、用便後また食前の手洗い等の習慣を全く忘れた日常生活であった。

特に苦痛を感じたことは、一片の紙も支給されないために、排便時の後始末には、毎日のことでもあった。ほとほと困惑した。草葉とか小石、あるいは木片等を利用して始末を済ませたものである。したがって、作業現場では常にこうした物に留意して取得し、携帯し

たものである。

入ッ当時各自が所持していた豊富な関東軍の被服も、作業に出た留守中に再三行われる私物検査の名の下にすべて押収されて、着がえの被服は一枚もなく、もちろんふんどしとかパンツ類もなく、文字通り着のみ着のままの全く身軽な身辺であって、抑留中に個人的に洗濯した記憶は全くない。

被服の洗濯については、十日に一回程度のシャワー浴があつて、その際、入り口で裸になり、出る時は反対側の出口に用意してある洗濯済みの被服を着装する仕組みが行われていた。また靴下についてもかえがなくなつて使用できなくなつた後は、布切れを足に巻きつけて代用していた。

バリカンとかカミソリについては所内に二、三組備へつけがあつたが、個人的には所持することは許されなかつた。器用な同僚は作業現場で鉄片を拾ひ、これを加工してハサミとかカミソリらしき物をつくつて、どうにか仙人の姿にはならず済んだ。

さて、人間社会には本能というか、必然的な三つの

欲望があるとか。すなわち食、物、性の三大欲望の中で、各自の主観によって異なるであろうが、私の体験では食欲が一番肝要であろうかと断言することができ。昔の言葉の「衣食足りて礼節を知る」という言葉がしみじみ痛感させられた。

支那事変当初の流行歌に「父よ あなたは強かつた」の歌詞の一節に「背もとどかぬクリークに 三日もつかつていたとやら 十日も食はずに……」と歌われていたが、私は抑留生活実に一干有余日の毎日が空腹の連続で、なおその上に強制労働を強要される。このような悲惨な生活が他にあるであろうか。

腹痛で診察を受けても休養は認められず、発熱の場合には文句なく作業休が許された。

さて、私たちの食生活であるが、朝食はパン一切れ（一斤の食パン四ツ切り）と、わずかに豚肉の匂いがあるスープを飯盒の蓋一杯。作業場での昼食は、重病入食のお粥（カーシャ）が飯盒に約半分、箸もスプーンも不要で流し込める。夕食については、朝食と同量の黒パン一枚とスープが飯盒におおむね半分の量であつ

て、三食分を二度に食べて空腹がおさまる量であった。

関東軍の給与でつくられた強靱な体も、このような粗食「スターリン給与」で、果たしていつの日か訪れるであろう帰国「ダモイ」の日まで耐えられるであろうか。作業現場で枕木運搬をすれば、この大きさのカステラ一本が一度に食べられるであろうか、また、電線の束を運べばこれくらいの大さきのドーナツが何個食べることができであろうかなど、同型の物を見ればすべて食物が連想され、全くの餓鬼道に墮ちていたのは私一人ではなかった。

同僚は現役兵の若者集団であったが、誰一人として異性のことなど話題にする者はなく、ただただ一日も早く祖国に帰ることと、帰ったらまず最初に口にする食物は何か、とにもかくにも腹いっぱい食べることが唯一の望みであった。この望みがいつ叶うものやら、きょうもまたむなししい一日が過ぎて、南京虫と同衾して夢路でしっかり食べるのである。

当時のソ連の状況はまことにお寒い限りであった。すべての生活物資は欠乏しており、私が復員した二十

三年七月ごろの日本の方が国民生活は豊かなように見受けられた。第二次大戦に米国の軍事援助が受けられなかったならば、ナチス独軍の軍門にくだっていたのではなからうか。例えば、鉄道の貨車、機関車については旧満鉄またはドイツから奪った物であり、トラックはオールUSAの製品であった。また警備兵が携帯している自動小銃から弾薬に至るまで米国製品であった。ナチスに戦勝した結果、ゲルマン民族の優秀な科学者たちを招致し、その者たちの援助と協力によって今日の強大な軍事産業を興し、もって米国と並ぶ国家をつくったのではないだろうか。

アングレンの街は人口約八千人少々の街であり、その大半は関東軍の精鋭六千人弱で、残余はウズベク系とわずかなスラブ人で構成されていた。街は前述のとおり高原地帯の辺境の地であって、石炭を少量産出するのみで、当時は市街地の造成と地下資源発掘のために戦後開発途上の街で、市民生活の必需品は一切生産手段がなく、したがってすべての物資は他の地域からの貨車輸送に依存する状況であった。現地で生産され

る物は、唯一、街の中央を流れる川水であった。

作業場での監視兵たちのほとんどが昼食など携行していなかった。たまに黒パン一枚をかじりながら、日本人と同じ（ヤボンスキーとアジナコ）だと笑っているものである。

ある現場の監督の言うには、日本人は体形は劣るが大食であると言う。私たちは、ソ連人は石頭（カーミンガラワー）が多いと言いつ返ししたものである。

かの独ソ戦における最大の激戦地レニングラードの攻防戦においては、市街地は独軍によって壊滅的な打撃を被り、ソ軍の守備軍将兵は補給路を断たれたために、腰の皮バンドを細切れにしてスープをつくり、このスープのみで一週間戦い、ようやく独軍を撃退したと語っていた。

寒さには殊のほか強靱な民族であった。満州からの列車輸送中も、進攻して来たのが八月九日の盛夏であり、彼らは夏服のまま列車警乗に乗り込み、わずかに日本軍から押収した雨衣または冬用の外套を着たまままで夜間もデッキ上で勤務しており、手袋等は着装し

ていなかった。

戦後日も浅く軍政下であって、市長は陸軍大佐であった。建設途上のため小さく、しかも粗末な市庁舎へ、トラックに便乗して登退庁していた。街には乗用車が一台もなかった。また市長夫人は炭鉱事務所勤務しているとか、働かざる者に対しては食糧の配給が認められないために、好むと好まざるにかかわらず何らかの労働を強要されていた。子供たちについても、義務教育期間中は登校することにより食糧の配給が受けられる。したがって登校拒否などの現象は見られなかった。しかし、これはスラブ民族のみで、蒙古系民族の子供たちは狩猟とか羊、山羊の群れなどを追い回しながら山野を走り回って楽しむように遊んでいた。

苦痛に満ちた抑留生活もはや三度の正月を迎えた二十三年一月二十八日、私は同僚五人と、アングレン市唯一の火力発電所に二交代制による夜間作業に勤務中であった。作業は、貨車輸送により搬入された石炭をベルトコンベヤーを利用して燃焼釜への送炭であって、往復ともに警備兵もつかず、しかも一定の出力を保つ

に必要な石炭を送ってれば誰にも文句も言われず、他の現場よりも比較的に軽い作業であったが、休憩室もない吹きさらしのため寒さには閉口した。

昭和二十三年一月二十九日午前二時ごろの深夜、折からの降雪と冷え込みによって、コンベヤーのプリーに付着した粉炭が凍結してベルトが滑って空転し、送炭が不能な状態となったので、私はプリーに付着した粉炭を取り払い中に過って右腕をプリーに巻き込まれ、けがをした。

直ちに発電所員がラーゲルの日直将校に通報してくれて、待つほどもなく地区の病院に収容された。病院とは名のみであって、薬品の備蓄も少なく、ましてレントゲンなどの機械類は皆無であった。軍医さんはソ軍の女医さんと九州帝大出身の内科医須石博士の二人であった。早速診察を受けたところ、右上膊しょうたけ、前膊骨折とのことで、副え木を当てて固定され、あとは自然治癒を待つこととなった。関節の脱臼については遂に発見されることもなく、何らの処置も施されず放置されたことが原因で現在も屈折が不良となっている。

受傷から四月四日までの間アングレン病院で療養生活を続けていたが、同日夕食後転院が決まり、翌五日朝食後、貨物列車でアングレンの街を離れた。病院出発の朝、ラーゲルから、旧補給中隊以来の戦友である新潟県出身の篠沢君がただ一人、見送りに来てくれた。この日を最後として、以来四十余年の歳月を経た今日まで、九七飛大の戦友たちの消息は一切不明である。

私たち八人はその日の夕刻カガントンという街の病院に到着した。この街は、ウズベキスタン共和国の首都タシケントに近い街で、高層建築も見受けられるかなりの都会であった。同共和国内の各地に点在する日、独両国の戦時捕虜専用（ワイナープレッ）の病院であって、日、独、ソ三国の軍医が勤務しており、日、独兵士の患者が七十人ほど入院中とのことであった。独軍患者とは病棟も区分されていたので、遂に接触することもないままで終わった。

同胞患者はおおむね症状が固定した外傷者で比較的に明るい雰囲気であったが、ダモイの日を一日千秋の思いで待つ毎日であった。転院後一カ月を経た五月五日、

遂に待望の日が訪れた。

輸送に耐えられる患者五十一人は、朝食後シャワー浴を済ませ、ソ軍の女性軍医さんの最終診断後に、ソ連人看護婦の手によって頭髪を切り、髭剃りも行い、入ソ以来初めて爽快な気分を味わったが、驚いたことに陰毛も剃り落とされて、上も下もすっきりした。衣服は相も変わらずソ軍兵士の払い下げ品であったが、洗濯したてで気持ちがよい。

かくして旅立ちの用意も完了し、同日午前十一時ごろ駅に着き待機中の貨車に乗り込んだ。列車は十六両編成だったが、他の地区から来たのであろう、どの車両にも同胞兵士の顔が見受けられ、心なしか喜びにあふれた笑顔が見られた。

貨車は入ソ当時と大差はないが、貨車の扉と明かり取りの窓の開閉が何らの制約もなく自由であり、しかも裸電球が取り付けられてあった。その上、二段の板敷きのベッドには旧軍用の毛布も敷かれていた。彼ら（ソ連）も、少しでもよい印象を与えるべく取りはからったものであろうか。

いよいよ列車は同駅を出発した。祖国の五月中旬ともなれば新緑に包まれて若葉の美しいころであらうに、この地の春は遅く、ようやくにして草木が芽吹き始め、春近きを感じさせる風景であった。

ナホトカに到着したのは六月六日の午後四時ころであった。この一カ月間は昼となく夜となく列車は停止することを忘れたかのように走り続け、わずかに給食、給水のため停車するのみであった。排便、排尿などの時間的な余裕もないために、必然的に入ソ時と同様に床に穴が設けられていたのでこの穴を利用した。ここでも排便後の始末に困り、靴下に代用している布きれで何とか処置してきたが、一カ月の汽車旅で、ナホトカに到着した時には両足とも素足であった。

カガントンを出発して二十日くらい過ぎたころ、ノボシビルスク駅において四時間程度停車した。同駅のホームの片隅にバラック建てのシャワーが設けてあって、これの使用が許された。しかし、七百人近い者が四時間では一人当たり約二十二秒間で、到底体を洗う時間的余裕などない。被服の着替えがやっとであった。

給食については、ラーゲルと同じく黒パンとスープであった。

列車は相も変わらず大平原をひたすらナホトカを指して走り続ける。駅舎もまた民家も見られない日もあった。諸兄も名称だけのご存じのバイカル湖畔を目にしたのはいまだ夜も明けやらぬころであったが、夕闇迫るころになっても依然として湖畔に沿って列車は走っていた。新幹線のスピードには比較できないまでも、十数時間経てなお湖影が眺められるということは、いかに広大であるか想像されると思う。祖国日本の鐵路ではトンネルに次ぐトンネルの連続であるが、彼地では一カ月間走行してわずかに十六カ所のトンネルが数えられたことを記憶している。それも、バイカル湖を過ぎて沿海州に入り、ナホトカに到着する五日間であった。

初年兵当時、門司港を出航して西貢サイゴンに至る間、並びに西貢より大連に帰る往復航海にも、それぞれ一カ月近い船内での生活経験を積んでいるが、それにもまして列車での三十日間は、比較できないほど極めて苦痛

の多い旅であった。輸送船の場合は随時船内を自由に行動することができるが、貨車内では行動することは望むべくもなく、終日寝て過ごすのみであった。

長く窮屈な旅もやっと終わり、終着地ナホトカに着したのは六月六日の午後であった。

ナホトカでの生活は、引揚船の入港を待った七月六日までの間であったが、健常者は糧秣運びその他の軽作業に従事させられ、作業の課されない者は、連日、民主教育の美名の下に、共産主義、マルクス・レーニン主義の洗脳教育に強制的に駆り出され、集合場所への往復にも隊伍を整え「民衆の旗赤旗は我らを守る」の革命歌を歌わされ、散会の際には、ソ同盟万歳、スターリン元帥万歳を三唱させられた。この時、声も出さず、もろ手を挙げない場合は叱責され、その叱責に對して反抗的な態度をとれば、日本人のリーダーによって重労働が課され、なお反省しない者は再び辺境のラーゲルに逆戻りする結果となる。

民主委員、即ちリーダーは絶対的な権力者であって、生殺与奪の権限を保持していた。あくまでも信念に忠

実に生きることこそ立派であるが、理非を弁ぜない輩に反抗した結果は明白であって、私は、卑怯な手法ではあるが、帰国が最大の願望であり、一切の自己主張を放棄して大衆の流れに順応せざるを得なかった。

ともかくにも帰国しなければならぬ。民主教育が風靡して、他人を中傷によって陥れようとする日本人が確かにいる。まさに犬的（サバンチカ）な人種が横行するラーゲルから一日も早く逃げ出したい。その一念にかられ、自己主張は一切放棄して、ひたすらに乗船できる日を待った。

重苦しい雰囲気（ダスヴィダーニヤ）の日が遂に来た。夕食後、明日午後一時に所内の民衆広場に集合するよう指示があった。港には日本の船が入港している。帰国が確定したようである。万感の思いが去来してまんじりともせず、眠れぬ一夜が明けるのを待った。

明くれば昭和二十三年七月六日、昼食を早目に済ませて全員が広場に集合した。そこにリーダーが中央に進み出て、「これから氏名を読み上げる、その者は本

口帰国が許される者である」と、次々に氏名が読み上げられ、呼ばれた者たちは一様に喜色にあふれた笑顔を見せている。私が呼ばれたのは二百人目ぐらいであった。その間の不安と焦燥……随分長い時間待ったように感じた。リーダーの一声によって運命が決まるのである。呼ばれなかった同僚の落胆振りを見るに耐えず、慰めの言葉もない。

今回の帰還者一千九百余人が決めた後に、リーダーの音頭によってまたしてもスターリン元帥万歳、偉大なるソ同盟万歳を叫ばされ、最後に「諸君は祖国に帰るのではない、帝国主義、軍国主義の日本を解放するための戦士として敵前上陸を敢行するのである」との趣旨の、全く一人よがりの陳腐な訓示があった。

午後三時過ぎ、革命歌に送られながら宮門を出発した。隊列の前後を警備兵に守られながら、徒歩約二十分でナホトカ港埠頭に着いた。

岸壁には船体を真っ白に塗装し、煙突には赤十字のマークも鮮やかな病院船高砂丸が停泊していた。この時、船のマストにもどこにも日章旗は掲揚されていな

かった。戦前戦中には大日章旗が翻っていたのにと、しみじみ敗戦を痛感させられた。高砂丸のデッキでは船員、看護婦さんたちが盛んに手を振って迎えてくれる。我々は船に乗り込むまでは依然として捕虜の身である。手を振ったりの応答もせずじっと見上げて、ただうなづくのみであった。

岸壁では、日ソ双方の引渡し業務も円滑に進み乗船が開始された。警備兵や見物の市民たちの「ダスヴィダーニヤ（さようなら）」の声に送られ乗船が開始されたものの、梯団には受傷事故により片足切断した者、また足関節より両足切断した重傷者とか担架による搬送患者もおり、全くの健常者は少人数の梯団であって、予想以上に時間を要し、全員が乗船を終了したのは五時を過ぎたころであった。私は足が悪いわけではないので高いタラップも一気に上り、看護婦さんに手をとられて船内に案内され船室に落ちついたが、極度の緊張が堰を切った奔流のように一度に緩み、頬を伝う涙を禁じ得なかった。

この世に生を受けて以来初めて経験したあの悲惨な、

人間性を抑圧され全く自由を束縛された忍従の生活から今やっと解放され、祖国への第一歩を踏み出した。この感激、この喜びは何ものにもかえられないものであった。もちろん、祖国舞鶴の岸壁に降り立った際の喜びもまた格別であった。今顧みれば、苦痛に耐えかねて幾度自らの手で命を絶つことを考えたことであろうか。しかし忍従に耐え、今日こうして戦い敗れたけれども緑豊かな祖国は、心身ともに傷つき、皆さんが私たちを暖かく迎えようとしている。この日が生涯忘れられない日となった。

全員の乗船が完了して定められた船室に落ちついたころ、船内放送により、船長さんの慰労の言葉に続いて、引揚援護局より派遣された係官からのあいさつ並びに内地の現況についての説明がなされた。

私は今こうして祖国より迎えの高砂丸の船室で喜びと感慨に浸っているが、彼の地でいままなお強制労働に汗と涙を流しながらひたすらダモイの日を一日千秋の思いで待ち焦がれている日本人同胞たちを思うと、その帰国が一日も早く実現されることを祈りつつも、胸

の痛む思いでいっぱいであった。

傷つきすぎ、他人が信用できず猜疑心の塊のようになかたくなな心も、温かく母親のように慈愛に満ちた心と言葉で接してくれる看護婦さんたちの言動によって、一同の心も少しずつ和んできたようである。

間もなく夕食が支給され、夢にまで見た赤飯に鯛の尾頭つきではなかったけれども、遼陽以来久方ぶりの麦飯に味噌汁と小魚一匹、梅干の漬物という、粗食ではあったが十分に満足できる量であって、二年数カ月ぶりに箸を使用した日本人らしい食事であった。私は箸を使うことができないために、看護婦さんのお世話にならざるを得なかった。

ほどなく、船は喜びと希望を乗せて静かにナホトカ港の岸壁を離れ出航した。これで名実ともに本当に解放されたのである。そこで同室の軽傷者五、六人の戦友と看護婦さんに案内されてデッキに上り、万感の思いを込めて暮れなぞむナホトカの夕景を眺めた。

高砂丸はエンジンの音も軽やかに進路を南へと波も穏やかな日本海を横断して、船中何らの波乱もなく、

祖国の緑の山々が日に飛び込んできたのは出航後三日経た八日午後七時ごろであった。

八日の夜は港内に停泊。明日の上陸に備えての各種書類の作成とか、健康上の問題、また帰郷地等の調査業務が行われたが、私は文字を書くことができないため、またしても看護婦さんの好意に甘えなければならなかった。

明ければ七月九日、船内での最後の朝食を済ませ午前九時より下船、上陸が開始された。空は快晴、真夏の太陽が照りつける。喜びにあふれ暑さも感じない。母国舞鶴の平棧橋に第一歩を踏みしめたのは十時二十分ごろであった。

顧みれば、昭和十七年三月十日門司港を出航して以来実に六年十一カ月、今日やっと帰ることができた。岸壁において復員業務一切を終え、慰労金一千元を受領した。船内でお世話になった看護婦さんにお礼とお別れの言葉を述べ、徒歩により国立舞鶴病院へ向かった。

簡単な診察を受けた後、入院することになった。全

員が「帰還舞鶴病院に入院」と父母あてに打電した。

この電文を読んだときの父母たちはどんなに喜ぶであろうか、そして入院を知りどんなにか心を痛めることであろうか。

九日の夜はゆっくり浴槽に浸り、抑留中の垢を洗い落として爽やかな気分が熟睡することができた。十日は終日ベッドで休養。十一日、散髪をして帰りにタバコ(光)二箱を購入し、なお乾燥したサツマイモ一袋を買ったところ、残金はほとんどなくなつた。今様の浦島太郎か? 戦中の金銭感覚しかなかつたので驚いてしまつた。

同日午後二時ごろであつたか、父母が米や食料を背負い、はるばる面会に来てくれた。太刀洗の教育隊へ入隊のため故郷を出た昭和十六年八月三十日から既に七カ年の歳月が経過している。最初は言葉もなく、ただ無言で見つめ合い、お互いを確認するのみであつた。

七月二十四日、国立岡山病院に転院となつて、同日午後八時ごろ岡山駅に着いた。駅頭において、チチハルで別れた同年兵の正本君が出迎えに来てくれ、お互

いの再会を祝福した。

七月二十五日外泊を許され、七カ年ぶりに郷里へ帰宅して、幼友達や村人たちの歓迎を受け、夜の更けるのも忘れて語り明かした。

二十六日に帰院後、翌二十四年五月末日までの間に前後七回の手術が行われた結果、右上膊、前膊の骨折による湾曲部は矯正されたが、関節の脱臼については、受傷後既に六カ月経過しており今さら手術の方法がなく、現在も屈折不十分のために不自由な日常である。

最後に、戦友諸兄のご健康とご多幸を祈りつつ

復員四十年後昭和六十三年七月九日 欄筆

アングレン哀歌の一節

(曲・松花江小唄)

(作者不明)

一、山もさみしきアフガン近く

ここは中亜のアングレン

夏は水沸き草木も枯れる

冬は降るふるゆきあられ

二、降りつむ雪は窓につもりて

家屋（カザルマ）うもるゆきのはら

父母よはらから幼きともよ

帰還らぬわれをいかにまつ

哀愁の凍土

広島県 藤森 隆行

追記

私は、本年七月二日に舞鶴の地を訪れた。特別の観光地ではないが、復員して四十年に当たり、あの当時を偲ぶためであった。

かつて復員の日、第一步を踏みしめた平棧橋、引揚援護局跡等は、四十年の星霜を経た今日、昔日の面影は何一つとして残されていなかったけれども、港を見下ろす小高い丘の一角に、舞鶴引揚記念館があることを知り、入館した。数多くの資料品とか写真が展示されていて、当時を偲び、一人の感慨深きものがあった。諸兄もついでの際には立ち寄られて、我々の経験した姿を見ていただきたいと思う。

一 さらば、ハルビン 哈爾濱

映画館を出ると、暮れなずむ大陸の暑い日差しもようやくや陰り、馬家崗バカコウへの下り坂を歩む若い二人に涼風が爽やかでした。

ナターシアと映画を見ての帰途でした。ナターシアとは彼女の愛称で、ロシア人は親しみを愛称で呼ぶ風習があります。金髪の明るいロシア娘で、年は確か十六か七だったと記憶しています。もう結構大人のムードがあつて、魅力的なグラマーな娘でした。二人とも見かけは大人でしたが、まだ純情そのもので、手を握ったこともありませぬ。彼女は私が住んでいた家の大家さんの孫娘でした。一年ほど前から知り合い、時々日本語とロシア語の交換教習などをしていました。

昭和十九年八月の頃です。帝政ロシア時代の名残を